

附属学校と公立・私立学校の実践研究に関する連携の開発(4)

— 知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の協働的追求を通して —

佐々木尚子・大森響生・原田孝祐・田淵健・中軽米璃輝*, 東信之・佐々木全**

柴垣登・鈴木恵太・滝吉美知香・上濱龍也***, 藤川健・中村くみ子・山口美栄子・昆亮仁・高橋幸・

伊藤慎悟・阿部大樹・熊谷知子・安久都靖・岩崎正紀・藤谷憲司****, 佐藤信・上川達也*****

*岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻, **岩手大学大学院教育学研究科, ***岩手大学教育学部

****岩手大学教育学部附属特別支援学校, *****岩手県立盛岡ひがし支援学校

(令和2年3月4日受理)

1 はじめに

平成29年公示学習指導要領では、児童生徒が自立して社会参加する力を育むためにキャリア教育の充実が明示された。キャリア教育は、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方(答申)」において、「一人一人の社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通じて、キャリア発達を促す教育」と定義され、キャリア発達を「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を表現していく過程」としている¹⁾。さらに、「特別支援学校高等部においては、個々の障害の状態に応じたきめ細かい指導・支援の下で、適切なキャリア教育・職業教育を行うことが重要である」²⁾ことから、高等部ではキャリア教育の一端である進路指導の充実が、重要な課題である。

これに対する一試行として、「福祉事業所との体験・面談会(以下、「体験・面談会」)」がある³⁾。これは知的障害特別支援学校における進路学習の内容として開発されたものである。特に重度知的障害の生徒の学習に着目し、進路学習の内容と方法の一部として提案された。また、課題として「体験・面談会」のキャリア教育上の体系的な位置づけの明確化が指摘されていた。

そこで、本研究では、「体験・面談会」を岩手大学教育学部附属特別支援学校(以下、本校)と岩手県立A支援学校による協働実施を通して、その報告と効果について検討する。さらに「体験・面談会」のキャリア教育上の体系的な位置づけを検討することを目的とする。

2 「体験・面談会」の企画概要

「体験・面談会」は、本校高等部1,2年生16名、公立A特別支援学校の高等部1年生16名を対象に、20XX年11月下旬に開催した。

実施にあたっては、両校共に教育課程上の位置づけを「総合的な探究の時間」(2年生は「総合的な学習の時間」とした。また、その目標は「職業や自己の進路選択について、実習先や進路先を自分で決定するという課題を通し、自己の在り方、生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していく」とされた。これを踏まえ、「体験・面談会」の目的を「卒業後の進路や生活のイメージとして、福祉事業所のサービス内容および先輩利用者の様子等を知る。ひいては実習先および進路選択の一部とする。」とした。

3 「体験・面談会」の実施概況

「体験・面談会」に際して、協力を要請した事業所は、盛岡近隣の就労移行支援事業所、就労継続支援A型事業所(以下、A型事業所)、就労継続支援B型事業所(以下、B型事業所)、生活介護事業所各2事業所の合計8事業所であった。各事業所からは、1~3名の職員が来校した。

各事業所に対しては、事前に、前年度の様子や企画の趣旨を伝え、ブースでの対応およびその準備を依頼した。それに基づき、各ブースにおいては、日常の活動に関するイラストや写真、パソコンでのプレゼン等や、本校を卒業した利用者を帯同し、生活の様子や作業内容の実践がなされた。

「体験・面談会」は、本校の体育館を主会場とし、7事業所のブースを設置した。1事業所については、事業所の性質や参加する生徒の特性を考慮し、静かな環境を保障することを目的に体育館から近い教室とした。また、体育館に設置した7ブースについては、衝立を配置して、生徒が各事業所の説明等に集中しやすいように配慮した。

「体験・面談会」の具体的な内容として、表1にタイムテーブルを示した。

表1 「体験・面談会」のタイムテーブル

9:30	開会式
9:50~11:30	体験・面談会
11:35	閉会式
11:45~12:20	意見交換会

活動では、各校4グループを編成し、グループ毎に4つのブースを選択して廻ることとした。このグループ編成及びブースの選択にあたっては、各校の進路担当者及び担任等で予め検討し、進路希望等に基づいて計画された。各グループには、教職員が1~2名入り、ブースでの体験・面談の様子を見守ったり、必要に応じてファシリテーターとして声掛けしたりした。

各ブースでの1グループあたりの時間は20分間とし、各事業所は、その時間内で説明、体験、質疑応答を進行した。例えば、あるA型事業所とB型事業所における生徒と事業所職員との面談の逐語録の一部を表2、表3にそれぞれ示した。

いずれにおいても、各事業所の準備や工夫がなされ、すべての生徒に参加場面が適切に準備された。結果、生徒は、意欲的に参加することができた。

4 「体験・面談会」の成果と課題

(1) 教職員アンケート調査のCS分析

「体験・面談会」後に参加した教職員19名(2校)を対象にアンケートを実施した。アンケート内容は、表4に示すとおりである。設問は19項目とし、回答は5件法(1:そう思わない, 2:あまり

表2 A型事業所ブースにおける逐語録

事: 仕事はもっと早くなります。だいたい8時から16時30分までです。では、渡している紙に沿って詳しく話します。働いていて大変なことは?とありますが、体調管理ですね。自分が休むとその分他の人が大変になってしまうので、なるべく休まないように元気に過ごしましょう。(略) 食品を扱う仕事なので、衛生面も大切です。(略) 皆さんから他に何か質問がありますか。

生: 油揚げの作り方は。

事: (写真で作業の様子を見せる)

生: どこで売っていますか。

事: お客様の家に直接宅配することもあります。(略)

表3 B型事業所ブースにおける逐語録

事: これ何だと思う? (写真を見せながら)

生: (思索している様子)

事: 革製品は、磨けば磨くほどつやつやになるんだよ。カランコ織りは、経糸に横糸を通してつくっていきます。

園芸班では、穫れたての野菜を量ったり、袋に詰めたりします。(略)

教師: ○○工房には畑があるんだね~

そう思わない, 3: どちらともいえない, 4: ややそう思う, 5: そう思う)とした。さらに、自由記述を求めた。

この調査の回収率は100%であった。「Q1 体験・面談会は有意義であった」を目的変数とし、他の18項目を説明変数として、CS分析を行った。この結果を表4に示した。また、縦軸は各項目の満足率であり、「4: ややそう思う, 5: そう思う」の回答の割合とした。横軸をQ1とQ2~18項目の相関係数として散布図を作成し、図1に示した。なお、満足率の平均値82.5と相関係数の平均値0.26をもって4つの象限に区切った。

これによれば、満足率と相関係数の高い項目は「Q10 生徒は事業所の様子等を知ることができた」「Q16 体験・面談会は進路学習の内容として必要である。」「Q18 教員は福祉事業所について理解す

ることができた」「Q5 体験・面談会における規模は適当だった」「Q8 生徒は事業所の説明に興味を示していた」「Q9 生徒は事業所の体験活動に興味を示していた」「Q14 体験・面談会は一連の進路学習の展開内容として位置づけることがよい」「Q12 体験・面談会は1学年の生徒に有効だ」「Q6 体験・面談会における企画運営に関わる労力は成果に比

して相応だった。」「Q19 教員は体験・面談会に参加してよかった」であった。これらは、「体験・面談会」の成果として解釈できた。

満足率が低く、相関係数が高い項目は「Q17 教員は生徒の適性やニーズを把握することができた」であった。これは、「体験・面談会」の課題として解釈できた。

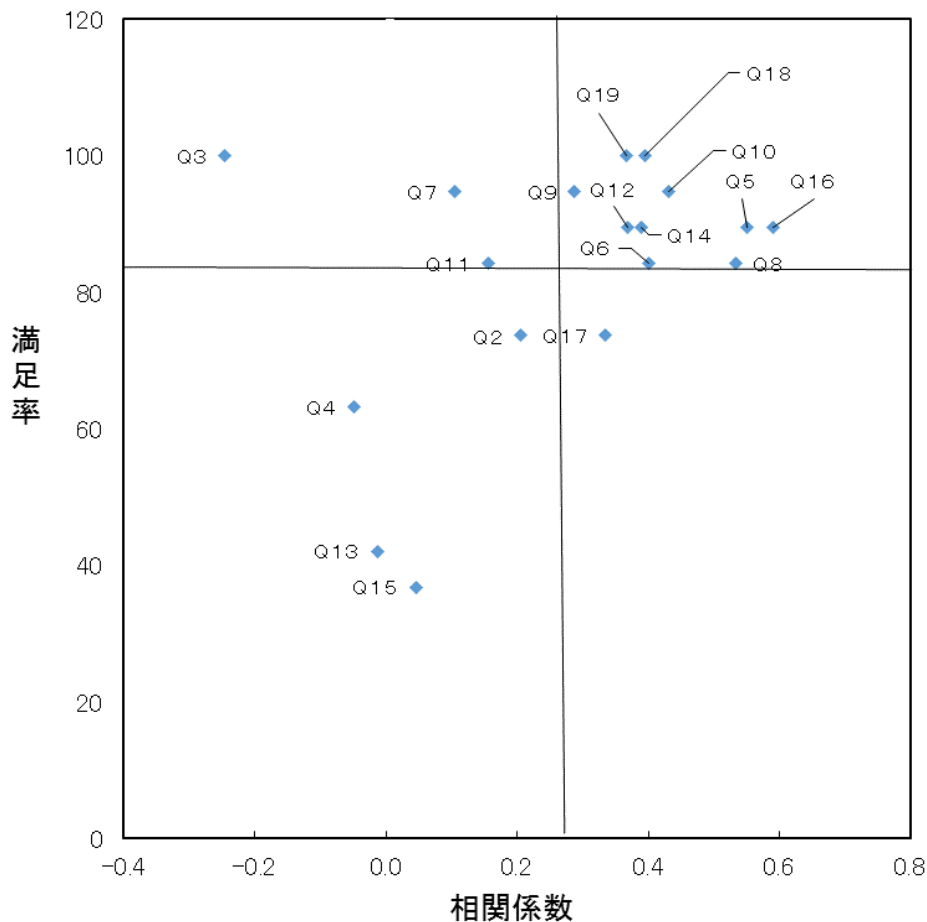


図1 Q1を目的変数としたときの 散布図

(2) 教職員アンケート自由記述

教職員の自由記述を表4に示した。ここでは、【学習に関わること】【教育課程に関わること】【企画運営に関わること】に分類することができた。

【学習に関わること】では、「事業所の方が学校に来ていただいたので、慣れた場所で体験・面談会に参加できた」「一度にたくさん事業所を知ることができるので生徒も考える材料が増えていい」「進

路について考えることができた」「体験は有効だ」「支援学校卒(卒業生)で働いている方もいてイメージしやすかった」等、肯定的な意見があった。また、「説明が多いとグループの生徒によっては分かりにくい」と、活動内容そのものに対する意見も見られた。

【教育課程に関わること】では、「一連の進路学習という表記が分からない」という学校における

表4 アンケート質問項目 各項目の満足率および相関係数

NO,	設 問	平均値	満足率	相関係数
Q 1	「体験・面談会」は有意義であった。	4.86	100.0	1.00
Q 2	「体験・面談会」の開催時期は適当だった。	3.43	73.7	0.21
Q 3	「体験・面談会」の一連の内容（開会式、体験・面談会、閉会式）は円滑だった。	4.71	100.0	-0.25
Q 4	「体験・面談会」における1グループあたりの時間（20分）は適当だった。	3.29	63.2	-0.05
Q 5	「体験・面談会」における規模（2校合同）は適当だった。	4.29	89.5	0.55
Q 6	「体験・面談会」における企画運営に関わる労力は成果に比して相応だった。	4.14	84.2	0.40
Q 7	生徒は体験・面談会に意欲的に参加していた。	4.57	94.7	0.11
Q 8	生徒は事業所の説明に興味を示していた。	4.00	84.2	0.53
Q 9	生徒は事業所の体験活動に興味を示していた。	4.71	94.7	0.29
Q 10	生徒は事業所の様子等を知ることができた。	4.00	94.7	0.43
Q 11	「体験・面談会」は2学年の生徒に有効だ。	4.43	84.2	0.16
Q 12	「体験・面談会」は1学年の生徒に有効だ。	4.71	89.5	0.37
Q 13	「体験・面談会」は一連の進路学習の導入内容として位置づけることがよい。	3.14	42.1	-0.01
Q 14	「体験・面談会」は一連の進路学習の展開内容として位置づけることがよい。	4.14	89.5	0.39
Q 15	「体験・面談会」は一連の進路学習のまとめの内容として位置づけることがよい。	2.43	36.8	0.05
Q 16	「体験・面談会」は進路学習の内容として必要である。	4.71	89.5	0.59
Q 17	教員は生徒の適性やニーズを把握することができた。	4.00	73.7	0.33
Q 18	教員は福祉事業所について理解することができた。	4.29	100.0	0.39
Q 19	教員は「体験・面談会」に参加してよかった。	4.86	100.0	0.37

進路学習に対する不明瞭さが指摘されていた。また、「事業所を訪問する前段階学習として設定できると(中略)事業所見学がより有意義になると思った」といった単元構想レベルでの指摘も見られた。

さらに、「1年生にとって、この時期に会に参加できたことは、進路についてリアル感をもつことができ(略)」と、1年生での参加の有効性を指摘する意見もあった。

【企画運営に関わること】では、体験時間の確保、事業所の持ち時間の時間配分等が課題として指摘されている。特に、ブースでの学習の流れについて生徒の学習、事業企画両方から課題として挙げられていた。また、事業所にとって「実習に来た生徒だけでなく他の生徒を見ることができてよかった」という意見にも見られるように、生徒理解や、さらに

学校理解にもつながっていくことが推測できる。

(3) 担当者による省察

一週間後、本校と公立A特別支援学校の進路担当者と大学の担当者3名で、事業の企画運営の省察を行った。ここでは、生徒の学習の様子に沿った具体的な意見が出された。生徒は体験・面談会を通して、事業所の作業を実際に体験したり、直接話を聞いたりしたことで、各事業所への理解が深まった。中には、「〇〇で仕事をしたい。でも、色々な人と関わって話したりもするので、それに慣れていかなければならないと思った」等、事業所で働くための必要な力を意識できた生徒も見られた。

表5 自由記述

【生徒の学習の関わる記述】

- ・事業所の方に学校に来ていただくことで、生徒たちはそれほど緊張することなく参加できていたように思う。
- ・他校の生徒と合同で活動することにより、自分を見つめる機会になるとよい。
- ・一度にたくさんの事業所を知ることができるので生徒も考える材料が増えていい。
- ・2グループの生徒については、説明よりも体験を多くとっていただけるとよかった。聞いてメモするのは難しいので、聞きたいことを事前に事業所の方にお渡しし、その流れで話していただくのいいと感じた。質問もできればいいが、話す、聞く、書くをするのは難しさを感じる。
- ・進路について考える貴重な体験だった。
- ・実体験をもとに、イメージを明確にしながら取り組んでいる生徒の様子が見受けられた。
- ・説明が中心になると情報が多すぎて、よく分からなくなっているようだった。その意味で体験は有効だった。生徒たちは大変緊張して受け答えしており大変良い経験をさせてもらった。
- ・支援学校卒で働いている方もいて、イメージをつかみやすかったと思う。

【教育課程に関わる記述】

- ・「一連の進路学習」という表記が分からない。進路学習の一つとしては大変有効だが、学校の実情等において進路学習が計画されると思うので、まずは学校における計画をしっかり立てることが重要であろう。
- ・生徒が事業所を訪問する前段階の学習として設定できると、事業所に対する興味関心を広げたり話の聞き方や見るポイントが分かったりして、事業所見学がより有意義になると思った
- ・進路学習については、3年間継続して取り組むものであり、本校の1年生にとって、この時期に会に参加できたことは、進路についてリアル感を持つことができ、2、3年生の時に、進路を考える際の材料になったと思う。
- ・選択できる福祉サービスにふさわしい企画、授業だと思う。来年はさらに他の事業所も来てくれると盛岡の選択肢がイメージできると思う。

【事業の企画運営に関わる記述】

- ・事業所の方から実習に来た生徒だけでなく他の生徒を見ることができてよかったとの話があった。
- ・事業所のいろいろなニーズについても聞くことができた。
- ・最初から体験をさせてもらい、その反応のしかたを事業所と共有できればよかった。
- ・事業所見学があり、時期はよいと思うが日程的に厳しかった。
- ・2校合同だからこそ、他校の生徒と一緒にブースになる組み合わせ方があってもよかったと思う。
- ・生徒、事業所、教員それぞれの立場でどのような意識をもって参加することがより有効かつめていき、最終的には保護者の関わりまで上げられるとよい。
- ・各事業所でやり方がブラッシュアップしていくとよいと思う
- ・説明が長く、十分に体験ができない事業所が複数あり、残念だった。
- ・説明の方が長くなり、残り2分の放送で体験に入る事業所があつて、残念だった。
- ・話からより、体験の時間が長い方が生徒に入りやすかったようだ。
- ・事業所の説明は要点を押さえ、生徒に分かりやすい内容になるよう工夫されており、良かった。
- ・短時間であったが、作業体験できたことは仕事内容が具体的に分かってよかった。
- ・体験→説明の順で展開するとより生徒のくいつきもよくなるのではと考えた。

開催時期については、生徒の実習や進路学習との関係もあるので検討が必要である。事業に関わって、ブースでの活動は事業所に一任したが、体験から実施してもらうのが良い、また、タイムコールの仕方も工夫が必要との反省がなされた。

5 考察

「卒業後の進路や生活のイメージとして、福祉事業所のサービス内容および先輩利用者の様子等を知る」目的で開催された「体験・面談会」は、教員による評価及びCS分析の結果から、事業所を理解する取組であったことが明らかにされた。また、事後学習において、生徒が多く事業所について理解を深めることで進路選択や自分の課題を見つめ、前向きに取り組もうとする態度が育っていることも成果としてあげられる。

これを踏まえ、「体験・面談会」のキャリア教育上の体系的な位置づけを検討する。CS分析の結果や自由記述にも見られるように、教員は、生徒に対して、高等部1年生段階で事業所を知りたいことを求めている。これは、その後の実習や進路に関係し、社会への接続にあたる高等部での進路学習の充実につながるのと考えるに因るものであった。そのうえで、進路学習の単元を想定するならば、「体験・面談会」は、展開内容として位置づけることがよいと考えられていた。

このことは、キャリア教育上の体系的な位置づけとしての全体像自体が明示されていない現状にあって、今後の検討の足がかりになるであろう。

なお、近年、全国的に見ても知的障害特別支援学校の高等部の生徒数が増加し、実態が多様化している。すなわち、一人一人の生徒の実情に合わせた進路指導の充実が求められている⁴⁾。このことを踏まえ、今後の課題として、以下を挙げる。

①「体験・面談会」の有効性についての精査が必要である。特に、事業の目的とした「実習先および進路選択の一部とする」との内容については今回未着手であった。

②系統性のあるキャリア教育を行うためにも各学

校における進路学習の計画が必要である。そのなかで、「体験・面談会」については、多様な生徒の実情に応じて改善するなど、PDCAサイクルに基づいてより効果的な取組にすることが求められる。

③「体験・面談会」の実践的課題として、ブースでの活動では、作業体験から説明という流れを固定化するなどの具体的要領に関する改善が必要である。

謝 辞

各特別支援学校の校長先生を始め、関係の先生方、各事業所の皆様、逐語録の作成を担当した教育学部4年次の佐々木莉歩さん、3年次の八重樫千尋さんに深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 中央教育審議会 (2011) : 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf (2020. 2. 2 閲覧).
- 2) 前掲1)
- 3) 上川達也 (2019) : 知的障害特別支援学校における進路学習の内容・方法の開発—「福祉事業所との体験・面談会」の企画と実践—. 岩手大学大学院教育学研究科(教職大学院)教育実践報告書(未刊行).
- 4) 長田徹 (2018) : 新たな学習指導要領におけるキャリア教育. https://www.mext.go.jp/apollon/mod/pdf/newcareer_h28_20180223.pdf (2020. 2. 2 閲覧).